

海老沢達郎の教養講座

第7回 映画で楽しむ異文化理解—『風と共に去りぬ』について（その2） —『風と共に去りぬ』とクー・クラックス・クラン— (2021年10月15日)

今回は、第6回に続き、『風と共に去りぬ』についての後半部分（その2）の「『風と共に去りぬ』とクー・クラックス・クラン（Ku Klux Klan、以後、KKKといたします）」についてお話ししたいと思います。KKKとは南北戦争終了後、黒人を威圧した白人至上主義者の秘密結社のことです。南北戦争が終了し、南部再建のために、北部から政治家、役人、また一儲けしようとする人たちが南部にやってきます。映画では、タラ農園の元農園監督で、女の問題で首になった貧乏白人のジョナス・ウィルカーソンが金持ちになって、北部から来たと思われる黒人と一緒に馬車に乗って、南部にやってきました。この黒人の手には鮮やかな色のカバンのようなものが見えますが、これはカーペットバッグと言い、カーペットの生地で作った丈夫なカバンで、このカバンに貴重なものなどを入れて南部に来て、一仕事、一儲けしようとする人たちを、カーペットバッガー（carpetbagger）と言います。



タラ農園に重税（300ドル）がかけられることとなります。スカーレットは手元に10ドルしかありません。そこに、金持ちになったジョナス・ウィルカーソンが妻のエミー（スカーレットの母エレンが、貧乏白人のエミーを看病し、腸チフスに感染して死亡）を連れて馬車に乗ってタラ屋敷に来て、「どうせ税金は払えないだろう。農園を高く買ってやる」と農園買収の話をしてきます。スカーレットは、ジョナスの買収申し出に怒り、また父のジェラルドも「タラ農園の所有者が誰だか、お前らに教えてあげよう」（I'll show you who the owner of Tara is.）と怒りを露わにし、馬に乗って彼らを追っ払うために後を追ひ、近道をしようと、映画冒頭の部分であったように屋敷の柵を飛び越えようとして失敗、落馬して死亡します。（英文はDVD「風と共に去りぬ」（ワーナー・ホーム・ビデオ）の英

語字幕より引用)

スカーレットは、税金工面のため、レット・バトラーを訪ねますが、断われ、そこで、アトランタで雑貨商（副業に材木販売も）を営んでいたフランク・ケネディに目をつけ、誘惑します。フランク・ケネディはスカーレットの妹のスエレンの婚約者でしたが、「スエレンは来月近くの人と結婚する」(“She’s going to marry one of the country boys next month.”)と嘘をつき（前回で神に誓った「嘘をついても」を実行したわけです）、強引に結婚します。そして、フランク・ケネディに税金300ドルを払らわせて、タラ農園を守ることに成功いたします。（英文はDVD「風と共に去りぬ」（ワーナー・ホーム・ビデオ）の英語字幕より引用)

スカーレットは商才も発揮し、復興には材木が必要と考え、製材所を買収します。資金が北部から一気に流れ込んで、アトランタはものすごいスピードで復興の道を進んでいきます。アシュレー・ウィルクス（メラニーの夫）も仕事を手伝うことになります。フランクやアシュレーの反対にもかかわらず、賃金が安いために製材所での労働に囚人を使用し、また、カーペットバグラーをも利用して、とにかく、「金のためなら何でもする」と言い、儲けを出すことに懸命になります。まるで、スカーレットは主であるかのように振る舞います。そして、商売は繁盛し、ウィルクス&ケネディ商会へと発展していきます。南部の人間で北部の人たち（カーペットバグラー）と利益のために協力する人をスキヤラワグ（scalawag）と言います。スカーレットもスキヤラワグと言っていいでしょう。この時、大きな事件が起きます。スカーレットは一人で、馬車で製材所に向かいますが、その途中で危険な Shantytown（多くの人が掘っ立て小屋で生活しているスラム街）を取り抜けなければなりません。拳銃を持って出かけますが、案の定、白人のならず者と黒人に襲われ、スカーレットが抵抗し、悲鳴を上げ、「助けて！」と叫ぶと、偶然、そのスラム街にいた、タラ農園の元奴隷頭のビッグ・サムに危機一髪のところ助けられ、ビッグ・サムに家まで送ってもらい、難を免れました。

このことを小説では、「この日の午後に起きた出来ごとは、現実とは認めたくないほどスカーレットを震えあがらせていた。夕暮れの森の中の曲がり道の陰から、あの敵意に満ちた黒い顔が自分を凝視していたと思うたびに体中が震えた。自分の胸をまさぐった黒い手、もしあのときビッグ・サムがあらわれなかったら？そう思うとスカーレットは頭を垂れ、目をぎゅっと閉じた」（“The

events of the afternoon had shaken her more than she cared to admit, even to herself. Every time she thought of that malignant black face peering at her from the shadows of the twilight forest road, she fell to trembling. When she thought of the black hand at her bosom and what would have happened if Big Sam had not appeared, she bent her head lower and squeezed her eyes tightly shut.”) と、スカーレットの受けた衝撃の強さを描写しています。映画では、スカーレットが Shantytown 付近の橋を渡る時に、白人のならず者が最初に、「金をくれ」と言って、スカーレットに襲いかかり、もみ合いになり、スカーレットが気絶しかけた時に、ビッグ・サムが来て白人のならず者を倒し、その時、黒人がビッグ・サムに後ろから襲いかかりますが、川の中に放り込まれます。このように、映画では、黒人はスカーレットの身体には直接触れていないように設定されております。（鍵括弧内は、マーガレット・ミッチェル「風と共に去りぬ」荒このみ訳、岩波書店、2016年より引用）（英文は、Margaret Mitchell “Gone with the Wind” Macmillan, London, 1991より引用）

スカーレットが襲われたその日の夜、フランクはスカーレットをメラニーの家に預け、拳銃を持って集会に出かけます。実は、スカーレットを襲った白人のならず者と黒人に復讐するための集会だったのです。フランクのほかに、アシュレー、ミード医師も参加していました。南部の男は淑女を守ると言って、彼らはスカーレットが襲われた Shantytown の焼き討ちに出かけ、小屋を焼き、二人が死亡しました。その際、フランクは頭を撃たれて死亡、アシュレーも肩に怪我をします。北軍がこの攻撃を察知していて、対策をたてていました。北軍は、Shantytown の襲撃を図り、指導した疑いでアシュレーを逮捕しようとしたが、レット・バトラーが機転をきかし、アリバイ工作をして、何とか、逮捕は免れました。

実は、この集会は、映画では、単に「集会」となっていますが、小説では、「政治集会」(political meeting) になっています。次の会話は、フランクやアシュレーが復讐のために出かけていた間、メラニーの家で女性たちが待っている時の会話です。

メラニー：「スカーレット、話しておくべきだったかもしれないけど、でも、
—でも—今日の午後、あなたはほんとうに大変だったから、だからわたしたち—フランクは言わないほうが—それにあなたはいつもクークラックス
クランをあからさまに批判していたから—」

スカーレット：「クランですって—」 スカーレットはその名前を最初、まる

で一度も聞いたことのない名前で、意味も理解していないように口にしたが、それから—。「クランですって!」。ほとんど悲鳴に近かった。「アシュリーはクランじゃない! フランクだって入っているはずないわよ! だって約束したもの!」 (“The Klan—” At first, Scarlett spoke the word as if she had never heard it before and had no comprehension of its meaning, and then: “The Klan!” she almost screamed it. “Ashley isn’t in the Klan! Frank can’t be! Oh, he promised me!”)

インディア (アシュレーの妹) : 「とんでもない、もちろんミスター・ケネディはクラン会員よ、アシュリーもそう。わたしたちが知っている男の人たち、みんなそうよ」。インディアが大きな声で言った。「みんな男でしょう? それに白人で南部人。恥じてるみたいにそっと見送るんじゃなく、誇りに思うべきよ。そして—」 (“Of course Mr. Kennedy is in the Klan and Ashley, too, and all the men we know,” cried India. “They are men, aren’t they? And white men and Southerners. You should have been proud of him instead of making him sneak out as though it were something shameful and — “)

スカーレット : 「みんなずっと知ってたのね、それなのにわたしは—」

メラニー : 「あなたが動揺するんじゃないかって、心配だったの」。メラニーは悲しそうだった。

スカーレット : 「政治集会って、そういうことだったのね。まあ、あの人は約束してくれたのに!」 (“Then that’s where they go when they’re supposed to be at the political meeting? Oh, he promised me!”)

(日本文は、マーガレット・ミッチェル「風と共に去りぬ」荒このみ訳、岩波書店、2016年より引用) (英文は、Margaret Mitchell “Gone with the Wind” Macmillan, London, 1991より引用)

映画では、白人至上主義の KKK については一切触れておりません。「触れていない」というよりは、物議を醸すので、むしろ「触れない」ようにしたのだと思います。ここで、KKK について簡単にお話したいと思います。KKK は南北戦争の直後にテネシー州プラスキ (Pulaski) という町に、南軍の兵士だった6人の帰還兵よって設立されました。6人とも先祖はスコットランド系アイルランド人 (Scots-Irish) で、6人とも名前も分かっています。Scots-Irish はアイルランドの北部 (現在の北アイルランド) を中心にしたアルスター地方から、アメリカに渡ったプロテスタントのアイルランド人のことです。Ku Klux はギリシャ語で「円環、サークル、結社」を意味し、6人とも、Scots-Irish でしたので、Klan という「一族」を表す語をつけて Ku Klux Klan という名前になったわけ

です。設立時は社交クラブのようなものだったと思います。因みに、第 28 代米大統領のトーマス・W・ウィルソン (Thomas W. Wilson、1856—1924) はアルスター出身の Scots-Irish で、荒このみ氏によれば、オレンジ党員の子孫とのことです。オレンジ党員といえば、「風と共に去りぬについて (その 1)」で、スカーレットの父ジェラルド・オハラがアイルランドでオレンジ党員の地代取り立て人を殺害した、あのオレンジ党員です。

小説では、フランクもアシュレーも、アトランタの野戦病院で南軍兵士に対して献身的な働きをした、あのミード医師も、そしてインディアが知っている男性は皆、KKK の会員だったのです。皆さんの中には驚いた方が多いのではないのでしょうか。白人至上主義の研究に取り組んでいる米チャップマン大学准教授のピート・シミー (Pete Simi) 氏の、朝日新聞とのインタビュー記事 (2017 年 9 月 15 日) で、現在の白人至上主義者について、「普通にビジネスジャケットを着ている人もいれば、どこにでもいる大学生のような人もいます。教養があり、知的な人もたくさんいます。貧しく、崩壊した家庭出身の人もいれば、弁護士や医者など裕福な家庭の人もいます。ステレオタイプにとらわれていると、白人至上主義がどれだけの広がりを持っているのか、吸引力を持っているのかを見誤ってしまいます」と述べています。KKK の会員は、当時は教養もあり、立派な方—「即ち、普通の方」—も、解放奴隷や北部から来た、ならず者から妻子を守るために参加していたのではないのでしょうか。そうであれば、フランクもアシュレーもミード医師も、当時 KKK の会員であっても何ら不思議ではありません。

KKK の登場は、小説ではクライマックスの場面と言ってもいいでしょう。インディアに、マーガレット・ミッチェルが南部の白人の気持ちを言わせているようにも思います。従って、マーガレット・ミッチェルは南部の白人の立場から、ある意味で、KKK を肯定しているのではないのでしょうか。それを裏付けるように、青木富貴子氏は「セルズニック製作の『風と共に去りぬ』にはひとつも出てこないが、ミッチェルは解放奴隷の凶暴さを語り、犯罪の急増を綴ることによって、クー・クラックス・クランが南部白人にとってどれほど必要だったかを執拗までに語っている。女性に対する暴行は、おびただしい数にのぼり、だれもが妻や娘の無事を絶えず気づかった。そのため、南部の男たちは、冷酷な戦慄するような激怒にかり立てられ、ついに一夜にしてクー・クラックス・クラン団が誕生する結果となった。」と述べております。しかし、暴力に暴力で対抗するのは問題があると思います。異文化の世界を理解することはとても難しいことです。 (鍵括弧内は、青木富貴子「風と共に去りぬ」のアメリカ南部と人種問題」、岩波書店、1996 年 より引用)

最後に、小説で、「主人公のスカレットの父親のジェラルドがアイルランドで殺人を犯し、着の身着のままアメリカに逃亡し、賭博（ポーカー）で農園の権利書を手に入れたこと、フランクやアシュレー、ミード医師が KKK の会員であったこと」は、映画では一切触れておりません。小説と映画の内容は、色々な理由があって違うことはよくあることであります。例えば、アーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway) の短編小説「キリマンジャロの雪」 (*The Snows of Kilimanjaro*) では、「アメリカ人の作家の主人公が妻と一緒にアフリカにサファリに出かけ、傷を負って壊疽になり、キャンプで救援の飛行機を待っている時の小説ですが、最後は、主人公は酒を飲んで眠り、夢の中で救援機に乗って、キリマンジャロの山をめざしますが、妻が目覚めた時、主人公は死んでいた」という内容です。映画では主人公は、救援機が来て、町に連れていかれ、無事元気になるという、ハッピーエンドの映画になっております。また、スコット・フィッツジェラルド (F. Scott Fitzgerald) の短編小説「バビロン再訪」 (*Babylon Revisited*) は、第一次世界大戦後のパリにおけるアメリカ人の若者の生活を描いた小説ですが、エリザベス・テイラー主演で映画化された「雨の朝パリに死す」 (*The Last Time I saw Paris*) では第二次世界大戦後に時代設定されております。やはり、小説が映画化された時は原作も読むと、小説と映画の違いがよく分かり、映画をより楽しく鑑賞できるものと思います。